

法華經に現れた神通

長谷川義浩

神通力は禪定の副産物として得られる修行者の特性・能力であり、外道であっても仏弟子であっても得られるものとされている。釈尊は成道時に三明六神通 (sādābhijñātraividya) を得たとされているが、仏弟子の多くも亦悟りを開いた折に六神通の具足が述べられている。

六神通というと神足通 rddhividhiñāna、天眼通 divyacakṣus、天耳通 divyasrotra、他心智通 racitajñāna、宿命通 Purvaivaśānasmrtijñāna、漏尽通 Aśravakṣayañāna (であるが) の中、最後の漏尽通は、涅槃の境界で仏教独自のものであり、漏尽通を除いた神足通を主とする五神通 (abhiñhāpāñeṇa) は釈尊以前古くより行われていたのであり、悟りを開かない仏弟子や仏教以外の修行者によっても得られていたのである。

呪術的神秘的なものは、いつの世でも宗教と密接な関係にあり、種々問題を宗教との間に持っている。現今でもこれらの面にのみ宗教を感じとり、宗教としている人々もいるのであるから、古代印度の社会においては、神通力はいかに広く社会に場を得ていたかが、うかがわれる。当時の外道仏弟子を問わず多くの人々が神通を得ることや、神

通を求めて修行をしたり、利養のために用いられた事の經典に見られるのがその証左であらう。

これらの神通力に対して釈尊の態度は求道の障礙となる神通、やたらと誇示する神通、利養のための神通等は禁止されていられる。

釈尊の仏弟子を導かれた神通は五神通でなく三明六神通であった。仏教独自の悟りの智慧である漏尽通に導かれる神通にこそ意義があるようである。

(仏弟子等の神通については楼神三十五号拙著「デーヴァダッタの神通について」を参照)

二

大乘仏教に入っては声聞の六神通の他に菩薩・仏の六神通が各大乗經典に見られる。諸仏菩薩の神通は仏弟子等の神通より複雑を極めて多種多様であり、神通の超自然的能力に託して教義思想を發表する手段としている体のもも多分にあるのを見出すのである、

諸仏菩薩の神通について瑜伽師地論は六神通を挙げて説明し殊に神境智通について十八変を数えている。

云何諸仏菩薩神通威力。謂六神通、一者神境智作証通 二者隨念宿住智作証通 三者天耳智作証通 四者見死生

智作証通 五者知心差別智作証通 六者漏尽智作証通 是名神境威力 云何諸仏菩薩神境智通 謂仏菩薩神境

智通 略有二種 一者能變通 二者能化通 云何能變神境智通品類差別 謂十八變 一者振動 二者熾然 三者

流布 四者示現 五者轉變 六者往來 七者卷 八者舒 九者衆像入身 十者同類往趣 十一者顯 十二者隱

十三者所作自在 十四者制他神通 十五者能施弁才 十六者能施憶念 十七者能施安樂 十八者放大光明

能変通とは能く自性あるものを転じて余物とならしむるを名くと釈し、能化通とは能く未だ曾つて有らざるに諸の事物を化作するに名くと釈されている。

十八変についても詳細に説明されているがこゝでは全略し、法華經典に現れる神通に関連したときに紹介するに止める。

大乘經典に諸種の神通が語られているのは、原始仏教時代の神通が受け継がれ、更に神通力讃仰の世間的地盤の上に立って釈尊の神通に対するものを肯定的積極的に神通力を利用し説かれるようになったように思ふ。

それは神通力の内容を見ると、その規模と超自然的能力の拡大が見られることより——諸仏菩薩の神通の意味するものが何を語り何を教示しようとしているかは別として。

菩薩が神通を現する理を大智度論には、

「菩薩は五欲を離れ、諸禪を得て慈悲あるが故に衆生の為に神通を取って諸の希有奇特の事を現じ、衆生の心をして清浄ならしむ、何となれば若し希有の事なくば多くの衆生をして得度せしむること能はざればなり」と説き明し、神通に対して積極的に意義を認め衆生済度のための一助としている。

釈尊が神変を用いるのをなるべくさげようとされているのに対し、大乘經典のそれは声聞の六神通と同じ様に仏菩薩の六神通を挙げている。しかし声聞の六神通と仏菩薩の六神通とは自ら異なるようである。

三

法華經における神通の種類は多様であり、又全体を通じて占める割合も非常に多いのである。その中いくつかにつ

いて考究してみようと思つ。

先づ仏弟子における神通の系譜は、法華経にあっては声聞の神通は三明六通と記されているようである。その例を挙げれば、

1 菓草喩品「知無漏法、能得涅槃、起六神通及得三明」*sad-abhijñā-traividya bharaṇī ye ca sā kṣudrika osadhī sampravṛtā*

これは機根を菓草樹木に配当し声聞を中菓草、梵文では小菓草に夫々たとえて菩薩と対比させられている。

2 授記品「諸声聞衆不可称数皆得三明具六神通住八解脱有大威徳」

bahu-śravakās tasya na samkhyā teṣāṃ pramaṇu naivasti kadr-citeṣāṃ/

sad-abhijñā-traividya-maha-rddhikās ca aṣṭa-vimokṣeṣu pratiṣṭhitas ca//

三明六神通の名目の下に声聞の名が見えるこの様な例は、この他に同品に一、化城喩品五百弟子授記品、宝塔品勸持品、随喜功德品にある。瑜伽論大智度論等にも仏菩薩の六神通を数えているのであるが、法華経に現れる六神通の名目はすべて声聞の神通となっている。しかし声聞の神通は名として現れるだけでその活動も説明内容もない。それに對し菩薩及び仏の神通については種々の事象を以て説き示され、いかなく神通の威力の場を多く与えられている。

前にも少しふれたが、菓草喩品に於て三明六神通を持つ羅漢は小菓草に喩えられ、神通をもって衆生を救ふ菩薩は大樹に喩えられ、より高いものとされている。

安住神通不退輪度無量億百千衆生如是菩薩名爲大樹

avivartī-cakram hi pravartayantā rddhi-balaṃmin sthira ye ca dhiraṃ/

pramocayanto bahu-prāṇi-koti mahā drmo so ca pravucate hi//

この小薬草（声聞）Ksudrika-ōsadhī と大樹（菩薩）mahā-drmo との神通について紀野一養氏は宗教研究一二三号に発表されている。

又五百弟子授記品にも「諸菩薩衆得大神通四無礙智善能教化衆生之類」とあって菩薩の神通は衆生を度するごとに主眼がある。

妙莊嚴王品において淨藏淨眼の二子が父を救う為に現じた神変は瑜伽論に説く熾然、卷・舒等の神変を現じている。

「於是二子。念其父故踊在虚空。高七多羅樹。現種々神变。於虚空中行住坐臥、身上出水、身下出火、身下出水、身出火、或现大身满虚空中而復现小、小復现大……」

又觀世音菩薩は三十三身に変じて十方の諸の国土に刹として身を現せざることなき神通力を示現し衆生を救済するのである。

「觀世音菩薩品の自在の業、普門示現の神通力を聞かん者には当に知るべし是の人の功德少からじ」と觀世音菩薩の神通の徳を称揚している。

この他各所に神通を法華経の菩薩は現している。

四

仏の神通は如何かという授記品に

「其仏説法現於無量、神通變化不可思議」

acintiyam rddhi-balam ca bhesyati prakāṣayantasy' imam agra-bodhim

(彼が最勝のさとりに現わす神通力は考えられないほどであらう)

仏が法を説くときに現わす神通力は量り知れない大きさ不思議さがあるという様に、法華経に於て現じた釈迦牟尼の神力は他経に見えないものがある。

原始經典において六神通は聖者の所得五神通は凡夫外道も得すと区別があったように、大智度論においては、五神通は菩薩の所得・六神通は仏の得するところであると記してあるように仏の神力は法華経において菩薩の神通と異っている点がある。その際立っているのが序品、神力品、寿量品である。

菩薩の五神通は序品と藥草喻品に見える

序品、又見菩薩勇猛精進入於深山思惟仏道 又見離欲、常処空閑、深修禪定、得五神通

藥草喻品では漢訳に缺けているが梵本に三界に迷える二乗を救うのに五神通を以てしている箇所に見える

仏は先づ序品で六種震動、放光光明の神通を現することから法華経の説法は始まる。

「今者世尊現神變相、以何因縁而有此瑞、今仏世尊、入于三昧、是不可思議、現希有事」の仏の神變の第一、六種震動は文句には無明を破すと釈し *Digba-nikaya II* に地震出現の因として八を説いている、

- 1、大風吹く時……水動き地動かす
- 2、神通にて地想水想を修してあるとき地動じ震動す
- 3、菩薩都史多天より没し正智正念に母胎に入る時

4、菩薩母胎より出づるとき

5、無上正覚を証するとき

6、無上法輪を転ずるとき

7、如来が正智正念にして寿命の素因を捨ずるとき

8、如来が完き捨離により般涅槃するとき

とあるがこの中、無上法輪を転ずるときに当るであらう。

(六種震動は經典中、序・化城喻・提婆・神力・藥王・妙音・に見える)

大智度論第八には

「人の衣を染めんと欲するに先ず塵土を去るが如く仏も亦是の如し。先づ三千世界の衆生をして、仏の神力を見て敬心柔軟ならしめ然る後に説法す。是の故に六種に地を動ず」と衆生の心の調熟のために六種震動を起すとしている。

瑜伽論三十七卷には

「震動者謂仏菩薩得_二定自在心調柔_一故・善修_レ心故。依_三定自在_一普能振動寺館舍宅村邑聚落……乃至無量無辺三千大千世界皆能振動是名振動」とあり禪定によるものと解している。

次に放光明神通は文句に

「次に仏の放光の瑞を明す即ち機に応じて教を設け惑を破して疑を除くことを表す。——光を放ち闇を破するは中道の智慧を生ずることを表す。光此土他土を照すは自覚覚他を表はす」と解し又「衆経に放光を明すこと同じからず大品には足下の千福輪相より乃至頂髻まで一々に各六万億の光明を放つ。彼に広く説くが如し。大経に面門より光を放つ

といふ此経は白毫より光を放つという縁宜同じからざるのみ」と放光にも大小あって同じではないとしている。

日蓮聖人も放光瑞の大小によって教の深淺を言われている。

又序品に「又見菩薩、処林放光、濟地獄苦、令入仏道」

「諸仏神力、智慧希有、放一淨光照無量国」とあつて光明が教を意味し智慧を表示している。

六反震動放大光明の神通は以上述べた様に偉大な教を説かれる前兆をなすものでありそれによつて大衆の心を調柔にさせ教を侍つの渴仰心を涌き立たせるものである。

法華経は六反震動放大光明等の神通によつて始まり神通示現によつて教が説かれ、神通力によつて流通をすゝめられている。神通と法華経の關係は密且つ大である。本論では原始仏教に於ける神通と菩薩の神通とが法華経において如何様に現れているかを考究した。法華経神通の眼目である仏の神通においては、その序を述べたに過ぎない。寿量品を中心とする宝塔涌出、神力の各品における仏の神力については後日を期したい。